

優秀賞

父と私の応援歌

青森県新郷村立野沢中学校

二年 佐藤 涼 夏

果てしない大空と広い大地のその中で

いつの日か幸せを自分の腕でつかむよう

父ちゃん、お気に入りの曲。私は何度聞いた、いや聞かされたことだろう。家にいればDVDで、車に乗ればCDで、そして、コンサート会場で。

我が家では、両親と姉と私の四人で毎年松山千春のコンサートに出かけていた。だから私はすっかりこの曲になじみ、小学校に入学する前に歌詞もメロディーも覚えてしまうほどだった。

父になぜこの曲が好きなのか尋ねたことがある。父は、こう言っていた。

「オールナイトニッポンっていうラジオ番組があった、けっこう聞いていたんだ。そのエンディングで『大空と大地の中で』が流れていた。いい曲だと思った。今のアイドルの曲もそれはそれでいいと思うけど、三十年たつて聞いたらどうかな。この曲は、三十年も前の曲だけど、今聞いてもいい曲だなと思う。」

私もこの曲が好きだ。一つ一つの情景が頭に浮かんできて、小さい頃から好きだった。曲全体が前向きなイメージで、「これからがんばっていいこう」という気持ちにさせてくれる。曲から励ましのエール

を送られているような感じがした。

母から、こんな話を聞いた。

「父ちゃん、本当は仙台で働きたかったんだよ。でも、じいさんやばあさんに止められたんだよ。」

初めて聞いたことだった。とても驚いた。父は現在、地元に残り、農業をやっている。父がどんな思いで仙台行きをあきらめ、どんな思いで農業を続けているのか知りたくなった。父に尋ねると、思いがけない質問に最初はとまどっていたが、

「昔の人がずっと受け継いで残してくれた田んぼや畑を守りたかった。作業小屋や農業用機械もほっとけない。おれが受け継がなければ誰もやる人がいないし、せっかく受け継がれてきた農地をただの荒れ果てた山にしたいくなかった。」

と、真剣な表情で語ってくれた。私は初めて父の口から父の思いを聞き、父が「大空と大地の中で」を好きになった理由がわかったような気がした。

私が生まれ育った新郷村は今、少子高齢化という大きな壁に直面している。人口減少という大変な問題を抱えているからこそ、私はこの村に残って、村のためになることをしようと思っている。私があこがれている仕事は美容師だ。自分のお店を自分の村に開き、子どもからお年寄りまで多くの人に利用してもらえ、笑顔あふれる美容室を開くのが夢だ。

今年の夏、私はその夢をかなえる第一歩を踏み出した。隣の美容室で職場体験学習を行ったのだ。その時の体験を通して私は本当にたくさんのことを学ぶことができた。お茶を出すときには一言添えること、円すいのようなフォームで髪をカットすること、お客様一人一人の髪質や好みに合わせてパーマ液やカラーリング剤を微調整すること、技術だけではなくコミュニケーション能力や化学的知識も必要なこと、様々な検定に挑戦し資格を取得しておいた

ほうがいいことなど。一つ一つの作業にはこんなに深い意味があるのかということにも気づくことができた。今からでも取り返しがつくから、苦手教科もがんばってみようとする気が出てきた。体験が終わる頃には、普段できないことを体験できた喜びと、忙しい中、一つ一つ丁寧に教えていただいたという感謝の気持ちが、私の心をうめつくしていた。

お世話になった美容師さんがおっしゃった。「ちょっと疲れた顔で来店したお客様が、笑顔になって帰っていくのを見ると、美容師をやっているよかったなあと思う。お客様の笑顔を見ると、私までうれしくなる。」

この言葉を聞いて、私は何かをつかんだような気がした。胸の奥に深く染み込んだその言葉は、これからも私の夢をしつかりと支えてくれることだろう。

最近父は、長瀬剛の曲を聞き始めた。松山千春も長瀬剛もふるさとをこよなく愛し、その思いを曲に託しているシンガーだ。父が彼らの曲にひかれるのは、それらがふるさとで精いっぱい生きている人々への「人生の応援歌」だからだと私は思う。父もきくとこれらの曲に元気づけられているのだろう。

美容師になるために、私は一度ふるさとを離れなければならぬ。きつと、生きることがつらいだとか苦しいだとか思う日があるに違いない。そんなときは、美容師さんの言葉を思い出そう。人生の応援歌を口ずさもう。

果てしない大空と広い大地が、私を待っていてくれるから。

作文を書くに当たって

車に乗るといつも流れていた松山千春の曲を、父がどんな思いで聞いていたのか書いてみたいと思いました。一番伝えたかったことは、「これから苦しいことやつらいことがあっても、家族とともに聞いた人生の応援歌を口ずさみ、『美容師になる』という夢に向かって挑戦し続けたい。」ということです。